キリシタン資料の
拗音および連母音を表す-iaについて

岸本　恵実

1．はじめに

キリシタン資料の規範的なローマ字綴りにおいて、-ia という綴りには二通りの用法がある。一つは、例えば Qiacu（客）のようにア段の開拗音短音節キャ・ギャ・ヂャ・ヒャ・ビャ・ミャ・リャを表す場合である。そしてもう一つは、Toriaguru（取り上ぐる）のようにイ段音＋アという連母音を表す場合である。本稿では、日本語の音韻の違いを書き分けることを基本としたキリシタン資料のローマ字表記において、この-ia については二種類の音韻の書き分けがなされなかったことの理由を、『日葡辞書』（1603 本篇刊、1604 補遺刊）、ジョアン・ロドリゲスの二著書『日本大文典』（1604-08 刊）『日本小文典』（1620 刊）をもとに明らかにしたい。

2．問題の所在

キリシタン資料のローマ字表記において、-ia という綴りは次のように用いられている。

①カ・ガ・ダ・ハ・バ・パ・マ・ラ行で、ア段の開拗音短音節キャ・ギャ・ヂャ・ヒャ・ビャ・ミャ・リャを表す場合。例、Biacudan（白檀）。

②イ段音＋アという連母音を表す場合。例、Qiabumi（木鐙）。

③仮名遣ではイ段音＋ヤで表記される音を表す場合。用例は少ない。[1] 例、Miaco（都）。

このうち①②は規範的な綴りとして採用され、使用され続けたものである。しかし、例えば Biacudan はビアクダンと連母音に、Qiabumi はキャブミと拗音に読み間違えられる可能性があるにもかかわらず、綴り字で拗音と連母音とを書き分ける方法は結局考案されなかった。

拗音は、築島（1969）などの先行研究から、平安時代にはすでに漢字音から日本語に入ってきていたことが明らかにされている。したがって、キリシタン資料の書かれた室町時代末期から江戸時代初期において、日本語の音韻として拗音が存在していたこと、拗音と連母音とに音韻上の区別があったことは、自明のこととしてよいだろう。

キリシタン資料では日本語の音韻的な違いを、四つ仮名 ji, gi, zu, zzu やオ段長音の開合ô, ô に見られるように、当時実際の発音にゆれがあったとしても、厳密に書き分けよ

うとする態度をもっていた。それにもかかわらず-ia 表記に関しては、音韻的な区別のあったア段拗音とイ段音＋アを書き分けることはされなかった。書き分けがなされなかった理由としては、書き分ける必要はあったがよい方法が考え出せなかったか、または、書き分ける必要がなかったかのいずれかが考えられる。-ia 表記の場合、この二つのうちどちらであったのだろうか。

３．綴り字上書き分けがないその他の例

-ia 表記について考える前に、キリシタン資料のローマ字綴りにおいて、一つの綴りで二種類の読み方が可能であるものについては、書き分けるよい方法がなかった（考え出されはしたが定着しなかった）場合と、書き分けの必要がなかったと考えられる場合の二通りの場合があることを、例を挙げて確認しておく。

３．１．書き分けるための適切な方法がなかったと考えられる場合

これには、撥音 n ＋母音 a, i, u の例がある。例えば『日葡辞書』の見出しにある Conan（今案）はコナン、Conin（婚姻）はコニンと読み間違えられる可能性があるが、綴り字でこの二種類を区別する方法は考え出されなかった。『日葡辞書』では読み誤りを防ぐために、An i（安怡）のような分かち書きや、Von-ai（恩愛）のように間に-（ハイフン）を入れ、書き分けを試みている例がある。

もう一つの書き分けのない例はギとグイの綴りで、gui と書いた場合、ギ、グイと二通りの読み方が可能である。これについては『日葡辞書』の例言に、

> また、Vguysu（鶯）のように、一語が一文字［一漢字］に相当するものであるときには、Vguisu（ウギス）と読まれないように、ギリシア字の Y を使って［Vguysu］と書くか、あるいは I 字を少し離して［Vgu isu と］書くかする。また、［母音の］V 字に変えて書くことにする。たとえば‘類’を Tagvi（タグイ）と書き、Vôqini cŭ（大きに食ふ）意の‘大食ひ’をVôgui（ヲゥギ）と読まれないように Vôgvi と書く。
>
> （訳本 p.5）

とあり、y 字の使用、分かち書き、v 字の使用という混同を防ぐための三つの方法が挙げられている。このほかハイフンを使った例もあり、これらの具体的な例については森田（1993:120-121）に詳しい。

しかし、以上のような分かち書きやハイフンによる書き分けなどの試みは、『日葡辞書』自体の中でも徹底していたわけではなく、『日葡辞書』以外のキリシタン資料ではあまり見られない。したがって、撥音 n ＋母音 a, i, u やギとグイについては、書き分ける必要があったにもかかわらず、よみを区別するための適切な方法が普及・定着しなかったということができる。

3．2．書き分ける必要がなかったと考えられる場合

カ・ガ行合拗音 qua, gua は、クア・グアと二音節で読むことも可能である。この qua, gua の発音に関しては、ロドリゲスの『日本小文典』「われわれの文字による日本語の一部の音節の表記とその発音について」に以下の記述がある。

> 文字 Q または G に続く V はラテン語とひとしくつねに半母音化する（文字［音］は子音または母音の力と強さを失うと真の半母音となる）。したがって発音は半母音でなければならない。この V が現れるのはつぎの音節にかぎられる。
>
> Qua　例、Quafan（過半）。　Gua　例、Guachirin（月輪）。
> Quai　例、Sanquai（参会）。　Guai［例］Guaibun（外聞）。
> Quan［例］Quannen（観念）。　Guan［例］Nenguan（念願）。
> Quat［例］Xiquat（死活）。　Guat　［例］Xǒguat（正月）。
> Quǒ［例］Quǒmiǒ（光明）。　Guǒ　［例］Quǒguǒ（□□）。
>
> （f.10　訳本（上）p.62）

この記述から、qua, gua は連母音のクア、グアではなく、常にクヮ、グヮという合拗音で発音されるべきものと見なされていたことがわかる。これは、クアについては、クは活用語尾以外は cu で書かれる原則だったから規範的には cua という綴りだったし、グアについても Guan（愚案）のようなグアという音を含む語彙は数がごく少ないことから、カ・ガ行合拗音 qua, gua はとクア・グアとは、書き分ける必要性が認められなかったものと考えられる。

4．拗音-ia と連母音-ia の書き分けについて

4．1．分かち書きやハイフンによる書き分け

3．によりキリシタン資料のローマ字綴りには、書き分ける方法が考え出されても定着しなかった場合と、書き分ける必要がなかった場合の二通りがあることが確認された。ここで、-ia 表記に戻って考えたい。

-ia 表記において、綴り字による拗音-ia と連母音-ia の書き分けはなかったが、3．1．で見たような他の連母音の場合と同じように、分かち書きしたり、-（ハイフン）を用いている例がある。例えば、『日葡辞書』の見出しには、分かち書きの例が 45 例、ハイフンを用いた例が 1 例ある。[2]

＜分かち書きの例＞

Cai atçume, ru.（買い集め、る）

Fei an.（平安）

＜ハイフンを用いた例＞

Tai-acu.（退悪）

しかしこれらの表記は、他の連母音表記と同じく、『日葡辞書』において多数を占めるものではなく、他のキリシタン資料に定着したわけでもなかった。さらに、『日葡辞書』における、分かち書きの 45 例とハイフンの 1 例の内訳は以下のようになっている。

<表１>『日葡辞書』に見られる連母音-ia の分かち書き・ハイフン使用例の内訳

種　類　（例）	数
複合動詞 （Vomoi acaxi, su（思ひ明かし、す）、Daqui ague, uru（抱き上げ、ぐる）など）	38
漢字二つからなる漢語 （Cai an（海晏）、Fei an（平安）、Mei an（瞑闇）、Sai acu（災悪）、Tai-acu（退悪））	5
その他 （Coi asagui（濃い浅黄）、Mani ai（間に合ひ）、Mecugui ana（目釘穴））	3
計	46

これを見ると、分かち書きやハイフンを用いた例は、複合語、中でも複合動詞が多数を占めていることがわかる。そしてこれら 46 例は、たとえ分かち書きをしたりハイフンを用いなくても、拗音と混同して発音される可能性が高くないものばかりである。したがって、これらの例は、拗音と連母音を区別する明確な意図があって分かち書きしたりハイフンを用いたのではなく、他の連母音表記に用いられた方法にひかれたものであったと考えてよいだろう。またこのほかに、キリシタン資料において拗音-ia と連母音-ia を区別しようとした試みは見られない。

上に述べたことから、キリシタンは-ia 表記に関して、拗音と連母音を区別して表記しようとする意図があったとは考えにくい。

４．２．拗音短音節に関するロドリゲスの記述

そうすると、拗音-ia と連母音-ia とは書き分けの必要がなかったと考えるべきだろうか。以下ではこの可能性について、ロドリゲスの記述をもとに考察する。

３．２．で見た qua, gua で表されるカ・ガ行合拗音と連母音クア・グアの場合には、混同されうる語彙の数自体がごく少なかった。しかし拗音-ia と連母音-ia の場合は、『日葡辞書』で見ると拗音-ia を含む異なり語彙数は 200 以上、連母音-ia の方も 300 以上あり、この数だけから考えると混同される可能性が高いように思われる。

ロドリゲスの『日本大文典』「‘五音’（Goin）と呼ぶ‘い、ろ、は’（I, RO, FA）の綴字」、『日本小文典』「Sumi（清）に属する基本音節のうち、二つの単純音節［字］で表すもの」には、二文字の仮名で表される拗音の発音について次のような説明がある。

○他の綴字の複合したもの

Cha		Chiya		Xa		Xiya	
Cho		Chiyo		Xo		Xiyo	
Chu		Chiyu		Xu		Xiyu	
Nha	は	Niya	の複合。	Fio	は	Fiyo	の複合。
Nho		Niyo		Quio		Quiyo	
Nhu		Niyu		Rio		Riyo	

(『日本大文典』56r　訳本 p.225)

［日本語で］二つの音節［字］を並べて、

Chiya（ちや）、Chiyo（ちよ）、Chiyu（ちゆ）

とかくものを［われわれの表記法では］それぞれ、

Cha Cho Chu

と表記し、Cha,Cho,Chu と発音する。(中略)

二つの音節［字］、

Niya（にや）、Niyo（によ）、Niyu（にゆ）

はそれぞれポルトガル語の場合のように、

Nha Nho Nhu

と表記し、Nha, Nho, Nhu と発音する。

二つの音節［字］、

Xiya（しや）、Xiyo（しよ）、Xiyu（しゆ）

はそれぞれ、

Xa Xo Xu

と表記し、Xa, Xo, Xu と発音する。

二つの音節［字］、

Fiyo（ひよ）、Kiyo（きよ）、Riyo（りよ）、Kefu（けふ）、Nafu（なふ）、Kifu（きふ）

はそれぞれ、

Fio Kio Rio Keô Nô Kiû

と表記し、Fio, Kio, Rio, Keô, Nô, Kiû と発音する。最初の四つ［にある I または E の音］はほとんど I または E の音でなくなり、半母音のようになる。例、Fionna（ひょんな）、Tanrio（短慮）、Fikeô（卑怯）。

(『日本小文典』8r　訳本（上）pp.53-55)

これを見る限り、『日本大文典』『日本小文典』のいずれにおいても、Cha, Nha, Xa, Fio, Quio（『日葡辞書』では Qio、『日本小文典』では Kio）, Rio については説明しているのに、同じように二文字の仮名で表されるア段の拗音-ia の発音については全く記述がない。こ

のことには注目すべきではないだろうか。すなわち、ア段の開拗音短音節のうち-ia の綴りを含まない Cha, Nha, Xa や、-ia と同じく i の字を含むオ段の開拗音短音節-io については説明があるのに、拗音-ia については全くふれられていないのである。

また、上の箇所に続く「日本語の全ての語をわれわれの文字で書き表すための音節。他に必要なものはない。」(『大文典』57r、『小文典』9v) という表題をもつ一覧表では、両方の書ともア段拗音短音節として Cha, Guia (『小文典』では Gha), Gia, Ia, Nha, Quia (『小文典』では Kia), Xa のみが挙がっていて、Fia, Bia, Pia, Mia, Ria は入っていない。

Ba,	Be,	Bi,	Bo,	Bu.	Ca,	—	—	Co,	Cu.
Ça,	—	—	Ço,	Çu.	Cha,	—	Chi,	Cho,	Chu.
Da,	De,	—	Do,	Dzu.	Fa,	Fe,	Fi,	Fo,	Fu.
Gha,	Ghe,	Ghi,	Gho,	Ghu.	Ga	—	—	Go	Gu.
Gua,	Guai,	Guan,	Guat,	Guð.	Gia,	—	Gi,	Gio,	Giu.
Ia,	Ie,	Ii,	Io,	Iu.	Ka,	Ke,	Ki,	Ko,	Ku.
Kia,	Keô,	Kio,	Kiu,	Kiũ.	Ma,	Me,	Mi,	Mo,	Mu.
Na,	Ne,	Ni,	No,	Nu.	Nha,	—	—	Nho,	Nhu.
Pa,	Pe,	Pi,	Po,	Pu.	Qua,	Quai,	Quan	Quat	Quð.
Ra,	Re,	Ri,	Ro,	Ru.	Sa,	—	—	So,	Su.
Ta,	Te,	—	To,	Tçu.	Va,	—	—	Vo,	—
Xa,	Xe,	Xi,	Xo,	Xu.	Za,	—	—	Zo,	Zu.
Ya,	Ye,	Yi,	Yo,	Yu.					

(『日本小文典』9v)

この『日本大文典』『日本小文典』の記述を文字通り解釈すると、少なくともロドリゲス個人は、この表にない Fia, Bia, Pia, Mia, Ria は「日本語の全ての語をわれわれの文字で書き表すため」に「必要」な音節とは考えていなかったことになる。(3)

4．3．語彙の中に現れる拗音-ia の形

-ia を含むア段拗音のうち、一覧表にある Guia, Gia, Quia (『小文典』では Gha, Gia, Kia、以下ではキリシタン資料でより一般的な表記 Guia, Gia, Qia に統一することにする) と、表から外された Fia, Bia, Pia, Mia, Ria との相違はどこにあるのだろう。音声的に分類することはできないので、実際にこれらの音を含む単語を見ていくと、一つの傾向に気がつく。それは、Fia, Bia, Pia, Mia, Ria という綴りはもっぱら Fiacu, Biacu, Piacu, Miacu, Riacu の形で現れることである。

そこで、『日葡辞書』中の拗音-ia を含むと考えられる語彙（見出し語）を和語も含めて調査してみると、＜表2＞の通りであった。この調査によると、拗音 Fia, Bia, Pia, Mia, Ria を含む語彙はほぼ全て-iacu という漢字音に含まれており、-iacu を含まない語彙は

Voriari, ru（おりゃる）という動詞のみであった。[4] 一方、一覧表にあった Guia, Gia, Qia は、-iacu として用いられる以外に、Anguia（行脚）、Gia（ぢゃ・助動詞）、Qiara（伽羅）など、いずれも-iacu の形をとらず、拗音-ia だけで用いられている例がある。

＜表２＞『日葡辞書』中の拗音-ia を含む漢字と語彙の数

（拗音-ia を含む語彙に用いられた漢字の種類数）／（拗音-ia を含む語彙数）

分　類	行	-iacu を含む	-iacu を含まない	計
ロドリゲスの	ハ行 Fia	3/ 38	0/ （5）	3/ 38（5）
の表になし	バ行 Bia	5/ 28	0/ （5）	5/ 28（5）
	パ行 Pia	1/ 1	――――	1/ 1
	マ行 Mia	1/ 18	――――	1/ 18
	ラ行 Ria	4/ 26	0/ 1（1）	4/ 27（1）
ロドリゲスの	カ行 Qia	4/ 46	3/ 6（4）	7/ 52（4）
の表にあり	ガ行 Guia	2/ 18	3/ 6	5/ 24
	ダ行 Gia	3/ 14	1/ 7	4/ 21
計		23/189	7/ 20（15）	30/209（15）

※（1）漢字のあて方は『邦訳日葡辞書』（岩波書店・1980）によった。

（2）連濁により清音が濁音になっているものは濁音の行に入れた。

（3）Qiacca（脚下）のように元々の漢字音は-iacu であったものが促音化している場合、漢字としては「-iacu を含む」の方に入れたが、異なり語彙数は「-iacu を含まない」の方に入れ、語彙数は（　）内に分けて記した。

＜表２－補１＞-iacu の綴りを含む漢字

分　類	行・綴り	-iacu を含む漢字（漢字数）
ロドリゲスの	ハ行 Fia	白、百、闘（3）
の表になし	バ行 Bia	白、百、柏、碧、辭（5）
	パ行 Pia	百（1）
	マ行 Mia	脈（1）
	ラ行 Ria	略、歴、礫、轢（4）
ロドリゲスの	カ行 Qia	却、客、脚、隔（4）
の表にあり	ガ行 Guia	逆、瘧（2）
	ダ行 Gia	択、着、著（3）

<表２－補２> Qia, Guia, Gia を含む語彙のうち、-iacu を含まない語彙

行・綴り	-iacu を含まない語彙（異なり語彙数）
カ行 Qia	花車、花奢な、花文字な、脚榻、脚絆、伽羅 (6) （Qiacu が促音化しているもの）脚下、脚脛、脚跟、脚布 (4)
ガ行 Guia	行脚、行脚の人、行脚の者、瘧熱、瘧病、山伽羅 (6)
ダ行 Gia	朝茶、朝茶の子、大茶碗、おぢゃる、ぢゃ、詰茶、葉茶壺 (7)
計	19 (4)

この表から、『日葡辞書』に見る日本語の語彙では、ア段の拗音 Fia, Bia, Pia, Mia, Ria を含む語彙は動詞「おりゃる」以外全て-iacu の形をとっていること、またこれに対して Guia, Gia, Qia は、-iacu の形をとらない一音節の拗音-ia を含む語彙があることがわかる。

ロドリゲスは-ia という綴りの発音について、『日本小文典』「われわれの文字による日本語の一部の音節の表記とその発音について」で次のように記述している。

> I は同一語内で次に A, I, o, ô, ŏ, û が続くと、半母音化する。例、Biacuren（白蓮）、fiappiki（百匹）、Ghiacu（逆）、Anghia（行脚）、Gia（蛇）、Kiara（伽羅）、Mochij（用ゐ）、Xij（椎）、Foxij（欲しい）など。ただし次の語のように二語にまたがる時はこの規則に含まれない。この場合最後の I は Y で表わす。例、Foxij（乾飯）、Kiy（奇異）、Buy（武威）など。 (f.10 訳本（上）pp.62-63)

つまり、-ia についていうと、一つの単語内で i と a が続くと i は半母音化し、拗音となる。但し、二語にまたがる場合は半母音化せず、-i・a と割って連母音として発音される、というのである。この、一単語中での-ia の発音は拗音化するという原則と<表２>とを併せて、ロドリゲスのおおよその考え方をまとめると以下のようになろう。ア段の拗音 Fia, Bia, Pia, Mia, Ria は日本語の音韻としては存在していたけれども、Fiacu, Biacu, Piacu, Miacu, Riacu という-iacu の形でしか日本語の語彙の中に現れなかった。そしてこの-iacu という形のときのみ、一単語として-ia は拗音化した。一方、同じ-ia の綴りを用いるア段の拗音でも Guia, Gia, Quia については、数は多くないが-iacu の形をとらずに-ia だけで一音節を構成する語彙が存在するので、日本語を綴る際に必要な音節と認められたのである。

ここで、拗音-ia と連母音-ia の書き分けという点から考えたい。Fia, Bia, Pia, Mia, Ria に関しては、拗音になるのは Fiacu, Biacu, Piacu, Miacu, Riacu という形のときだけであるから、その他は全て連母音であるとみなすことができる。したがって、拗音と連母音を書き分ける方法を考え出す必要はなかったことになる。

Guia, Gia, Qia に関しては、-iacu を含む語彙が多い一方、cu の付かない拗音-ia を含む語彙が少数ながら存在したから、ロドリゲスも日本語を表記するための音節の一覧表に入れたと考えられる。したがって Guia, Gia, Qia の場合、Fia, Bia, Pia, Mia, Ria のように拗音

になるのは-iacu の形のときだけとは限らないから、拗音と連母音を書き分ける必要が全くなかったとはいえない。しかし、その例は『日葡辞書』中＜表２－補２＞の 23 例（Qiacu が促音化した語 4 例を含む）とごく少ないので、連母音と表記を区別しなければならないほどではなかったと考えてよいだろう。

５．まとめ

キリシタン資料の規範的なローマ字綴りで、-ia という表記はカ・ガ・ダ・ハ・バ・パ・マ・ラ行のア段拗音短音節と、イ段音＋アという連母音の二通りのよみ方ができる。この二種類は読み誤る可能性があるにもかかわらず、異なる綴りで書き分ける方法は結局考え出されなかった。

一種類の綴りで二通りの読みがあるものについては、書き分ける必要があったが適切な方法が定着しなかった場合と、書き分ける必要性がなかった場合がある。撥音 n ＋母音 a, i, u とナ行音 na, ni, nu、ギ gui と連母音グイの場合は前者で、特に『日葡辞書』において分かち書きやハイフンの使用など読み誤りを防ぐための試みが見られたが、このような方法がキリシタン資料全体に普及することはなかった。しかしこれらの方法が考え出されたという事実から、読み誤りの可能性があり、書き分けの必要が認められていたことがわかる。一方、カ・ガ行合拗音 qua, gua と連母音クア・グアに関しては、クアの方は cua が規範的な綴りであるし、グアという連母音を含む語彙はごく少ないため、書き分ける必要がなかったと考えられる。

ロドリゲスの著書には、二つの仮名で表される拗音の発音を説明する箇所で、開拗音短音節のうち、ア段で-ia の綴りを含まない Cha, Nha, Xa や、-ia と同じく i の字を含むオ段拗音の-io については説明があるのに、拗音-ia については全くふれられていない。さらに、「日本語の全ての語をわれわれの文字で書き表すための音節。他に必要なものはない。」という表題をもつ一覧表には、ア段拗音のうち-ia を含まない Cha, Ia, Nha, Xa、-ia を含むものとして Guia, Gia, Quia（『小文典』では Gha, Gia, Kia）のみが挙がっていて、Fia, Bia, Pia, Mia, Ria は入っていない。

『日葡辞書』に出てくる日本語の語彙の中で、拗音-ia が出てくるときは原則として常に-iacu の形をとる。特に Fia, Bia, Pia, Mia, Ria については、ほぼ全て-iacu といってよい。Guia, Gia, Qia の場合は、cu の付かない拗音-ia 一音節を含む語彙もあるため、ロドリゲスは日本語を表記するのに必要な音節と認めたと考えられるが、そのような語彙は少数である。

ロドリゲスは別の箇所で、一単語内で i と a が連続すると拗音になると述べている。ア段の拗音-ia は、原則的に-iacu という形でしか日本語の語彙の中に存在しなかったから、-ia は-iacu という形のときのみ、一単語として拗音化し、その他の-ia は全て連母音にな

るものとみなすことができた。したがって、語の中に出てくる形がほぼ-iacu と決まっているア段拗音-ia と、連母音-ia とは、ことさら区別して書き分ける必要はなかったのである。

＜注＞

(1)『日葡辞書』には以下のような用例がある。(下線は筆者による。)

・Miaco (都)

Chùqua. Miyaco. i, Taitô no Miaco. *Cidade pr ̃cipal, ou metropole do Reino da China, tambem se aplicara ao Miaco de Iapão.*

Miacodori. i, Camome. *Gaiuota. P.*

・Fiai (冷やい)

Fiai. *Cousa fria. Vide,* Fiyai.

Fiyai. *Cousa fria, ou fazer frio.* X.

・Miazzucô (宮仕ふ)

Miazzucai, ô, ôta. *Seruir a gente honrada.* ¶ Miazzucaino nhô bô tachi *Molherers de seruiço.*

(2) 調査は『邦訳日葡辞書』(岩波書店・1980) による。したがって、原本にはない、訳者が立てた仮見出しの語も数に含む。このことは、以下の『日葡辞書』の調査においても同様である。

(3) オ段拗音短音節についても、Cho, Guio (Gho), Gio, Io, Nho, Quio (Kio), Xoのみが挙がっていて、Fio, Bio Pio, Mio, Rio は入っていない。つまり、-ioで表される拗音のうち、Guio, Gio, Quio は表にあるが、Fio, Bio, Pio Mio, Rio はないのである。但しオ段の場合、拗音-io と連母音-iuo とは、綴りが異なり混同される可能性がないため、拗音と連母音が-ia という同一の綴りをとるア段の場合とはかなり事情が異なると考えられる。しかし、本稿では-ia という表記についてのみ論じるため、-io についてはこれ以上ふれないことにする。

(4) 動詞「おりゃる」は、『時代別国語大辞典　室町時代編』(三省堂・1991) によると「お入りある」「おりある」から転じたものとされる。ロドリゲスの記述に従えば、一覧表に Ria という音節はないので、「おりゃる」は「ヲリャル」と拗音で読むのではなく、「ヲリアル」と連母音で読むわけであり、ここで拗音を含む語彙に入れるべきではないかもしれない。なお、＜表２＞中の和語はこの一語のみである。

＜参考文献＞

池上岑夫 (1993)『ロドリゲス日本語小文典』岩波書店

築島裕 (1969)『平安時代語新論』東京大学出版会

土井忠生 (1955)『ロドリゲス日本大文典』三省堂

土井忠生・森田武・長南実 (1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店

森田武 (1989)『邦訳日葡辞書索引』岩波書店

森田武 (1993)『日葡辞書提要』清文堂出版

付記

本稿は、平成10年度京都大学文学研究科博士後期課程研究報告を修正したものであるが、訓点語学会第180回研究発表会（平成11年5月、同志社大学）における丸田博之氏の口頭発表と多少重複するところがある。氏と筆者とが時期を同じくして個々に研究を進めていたことをお断りすると同時に、本稿の掲載をこころよく認めて下さった丸田氏に御礼を申し上げる。

（きしもと　えみ・博士後期課程）